琉球大学学術リポジトリ

ペルー沖縄県出身移民100周年記念誌（仮）資料としての若干の文献目録と解題

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石川, 友紀, Ishikawa, Tomonori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010165

〈資　料１〉

ペルー沖縄県出身移民100周年記念誌（仮）資料としての若干の文献目録と解題

石 川 友 紀

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．伊芸銀勇編『ペルー移民75周年記念誌』ペルー沖縄県人会，1987年（昭和62）１月15日発行，770ページの解題
Ⅲ．慶應義塾大学教授柳田利夫編著の一連の学術書の解題
　１．柳田利夫編著（1995）『アメリカの日系人－都市・社会・生活－』同文館出版，280ページ
　２．柳田利夫編著（1997）『リマの日系人－ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店，426ページ
　３．柳田利夫／文・義井豊／写真（1999）『ペルー日系人の20世紀－100の人生，100の肖像』芙蓉書房出版，205ページ
Ⅳ．アケミ・キクムラ＝ヤノ編・小原雅代他訳『アメリカ大陸日系人百科事典　写真と絵で見る日系人の歴史』明石書店，2002年（平成14）10月15日発行，424ページの解題
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

2006年（平成18）１月28日南米ペルー・リマ市において，沖縄県人ペルー移住100周年の記念祝賀式典が沖縄県人会館で約700人が出席して開かれた。翌１月29日には同式典が引き続き催され，午後からの祝典は会館に隣接する運動場で特設ステージが設けられ，稲嶺恵一県知事を始め県人やアメリカ合衆国，隣接するボリビア，ブラジル，またアルゼンチンなどの県系人も含め約1万人がつめかけた。ペルーの県系人が各市町村人会の団体別に色とりどりの衣装を着てのパレード，その後県系の小学生や婦人会による歌と踊り，琉球國祭り太鼓やアルベルト城間の率いるディアマンテスなどのコンサートもあり，会場内は夜おそくまで歓声に包まれた。

同年１月30日には第10回ＷＵＢ（ワールドワイド・ウチナーンチュ・ビジネス・アソシエーション）の世界大会がリマ市のリマスイスホテルで式典・基調講演・記念講演・ビジネス交流会・法曹会議・学者会議・交流パーティーが開催された。ＷＵＢ会員が世界各国10支部から約140人を含めペルー国内からも会員・非会員・来賓が約100人，合計約240人が参加し，相互交流を深めながら県系人ネットワークを活用した新たなビジネス展開の可能性を探った。筆者も同大会で「ペルー沖縄県出身移民100周年の歴史と実態－一世移民を中心として－」と題して基調講演を行った。また，「沖縄移民と琉球文化」をテーマとする学者会議に，聖田（大城）

京子（ハワイ大学教授），仲程昌徳（琉球大学教授），町田宗博（同），諸見里・宮里ドリス（ペルー県系人・作家）とともに参加し，多くの聴衆がつめかけ，活発な質疑応答もなされ有意義であった。

今回の沖縄県人ペルー移住100周年の記念祝賀式典は，すべて県系二世の手によって行われ，言語もスペイン語と日本語の両方が併用して使用された。今後，ペルー沖縄出身移民100周年の記念誌が発行されるかどうかは，現状では確認できなかったが，筆者としてはぜひとも100周年記念祝賀式典のイベントの記録とともに，日西両語による記念誌の発刊を希望する。

以下，本資料紹介では同上記念誌発刊参考のために，ペルーの沖縄県系人に関する若干の文献目録と解題を行ってみたい。

Ⅱ．伊芸銀勇編『ペルー移民75周年記念誌』ペルー沖縄県人会，1987年（昭和62）1月15日発行，770ページの解題

1981年（昭和56）8月8日から8月10日までの3日間，ペルー・リマ市においてペルー沖縄県人移民75周年・同県人会創立70周年記念と新会館落成・総合運動場建設の祝賀式典が盛大に開催された。当時，ペルー沖縄県人会事務局長の上原良和は本書でつぎのように記している。

> その式典には長崎大使始め，伊藤公使，アルバ・オルランディニ第二副大統領，当国官憲，沖縄からはるばるかけつけた西銘知事始め，大田県議会議長ら県議員団，同市町村長会グループ，県派遣芸能使節団，角力選手団，一般参加客など母県の大型祝賀使節団（二百余名）それに，隣国のボリビア，アルゼンチン，ブラジル各移住国からも県人会長や代表等の参加を得て，1981年8月8日盛大に開幕した。

本書の内容構成をみると，以下のとおりであった。写真グラビアにつづき，「記念誌発刊を祝す」で，記念誌編集委員長伊芸銀勇ほか5人の関係者の祝辞が述べられている。第1部のペルー移民75周年記念行事には，式典当日の祝辞として，沖縄県知事西銘順治ほか9人と，移民75周年記念行事の経過報告として，ペルー沖縄県人会長徳村政繁ほか5人の挨拶・報告と，同式典の際の感謝状授与者名が掲載されている。

第2部のペルー沖縄移民史には，写真グラビアとして，リマ市北部サンタクララ耕地における「沖縄移民第一航海者三十六名入耕地」の碑の写真や，ペルー沖縄県人会歴代会長名と顔写真などが掲載されている。ついで，呉屋勇の「沖縄県人会沿革」，山川宗英の「ペルーに於ける日系人の水産業」，金城次郎の「ペルー初の水稲栽培」の論考，ペルー沖縄県人会新会則がみられる。1984年（昭和59）時点での契約移民，戦後再移住女性移民，ペルー沖縄婦人会，帰来二世，ペルー社会上層部で活躍する二世の各座談会があり，上地豊子の「二世の立場から」ほか7人のエッセイ等がつづく。

第3部の資料編には，ペルー移民幸地加那のエスキヴェル耕地契約書（大正7年）や外務省外交史料館所蔵の第二次世界大戦前の沖縄県の移民関係資料が掲載されている。論考としては，伊芸銀勇の「沖縄移民発祥の地探訪記」，石川友紀の「沖縄移民の特色」「ペルーにおける日本移民の特色」，比嘉正範の「海外移住とその研究」などがある。多くのページがさかれている

のは，沖縄県からのペルーへの1906年（明治39）から1923年（大正12）までの3,688人（各市町村別表327頁より）の「ペルー渡航者名簿」である。ついで呉屋勇・並里清裕編の「ペルー沖縄県人会史年表」があり，1899年（明治32）から1982年（昭和57）までの84年間の詳細な県人会の歩みと関連事項が掲載されている。

第４部の特別付録には，75周年記念祝典寄付者芳名，運動場並に会館建設寄付者芳名，会員名簿（各市町村別），県人叙勲者名簿（昭和41年以降），日本・ペルーの大臣賞受賞者名が掲載されている。

第５部の広告には，ペルーの部，沖縄県の部に分けられ，団体，個人の広告が数多くある。

第６部の西語篇には，徳村政繁の挨拶，契約移民座談会，ペルーで活躍する二世座談会，移民資料館についてスペイン語に翻訳され掲載されている。

以上，内容を紹介してきたが，本書は編集に５年余の歳月をかけただけあって，ペルー沖縄県人移民75周年記念行事の詳細な記録とともに，前記ではふれなかった赤嶺全重郎の「ペルー沖縄県人会の団結と展望」などの諸論考，各種の座談会，契約移民の渡航者名簿など貴重な資料も多数収録されていて，その価値は高く評価される。

Ⅲ．慶應義塾大学教授柳田利夫編著の一連の学術書の解題

１．柳田利夫編著（1995）『アメリカの日系人－都市・社会・生活－』同文館出版，280ページ。

本書は慶應義塾大学地域研究センターの研究プロジェクトのひとつとして実施された「アメリカ大陸における日本人の研究」に参加したメンバーによる報告論文をまとめたものである。以下，本書の内容を概観する意味で，各章の論文名と著者名を目次に沿ってあげてみる。

第Ⅰ部日系人社会の形成と変容は，第１章「都市生活における『兼業』ストラテジー－明治期ハワイ出稼ぎ移民・佐藤常蔵の職業選択論理を通して」（赤木妙子），第２章「戦前期リマ首都圏における日系社会の人口分布と職業構成－ペルーの国勢調査と日本側史料の分析」（柳田利夫），第３章「1930年代サンパウロ市における日系学生結社－国家・ひと・エスニシティ（その１）」（前山隆），第４章「ニューヨークと日本人社会」（木村昌人）である。

第Ⅱ部日系人社会へのさまざまなアプローチは，第５章「サンパウロ在住日系人のライフスタイルと健康」（津金昌一郎），第６章「ヴァンクーヴァーの日系人の言語変容」（日比谷潤子），第７章「第二次世界大戦前のハワイにおける浄土真宗本派本願寺の日本語学校－ホノルルを拠点とした布教活動との関連で」（本多千恵）である。

第Ⅲ部日系人・日本人研究の位置と課題は，第８章「ラテンアメリカ世界形成500年と移民－民族交錯のなかの日本移民の位置」（国本伊代），第９章「移民研究と生活史研究－日系人・日系社会研究の方法論的課題」（有末賢），第10章「『アメリカ大陸における日本人』，その研究の地平」（荒川芳廣）である。

このうちペルーの日本人移民に関する論文は，第Ⅰ部第２章の柳田利夫の「戦前期リマ首都圏における日系社会の人口分布と職業構成」のみである。ちなみに，その内容を目次構成でみると，１．リマ市の拡大と日系社会，２．ペルー国勢調査資料を通してみたリマ首都圏の人口分布，３．秘露中央日本人会調査を通してみた日系社会，４．日系社会の職業構成となってい

る。本論文はペルー・リマ首都圏の日系人全体を分析の対象としているが，一部沖縄県出身移民について触れている。すなわち，４．日系社会の職業構成で，「これ（1935年の日系人就業者の分布：引用者注）を就業者の出身県別での上位３県－沖縄，熊本，広島－についてみてみると，全就業者数の54％を占める沖縄県人は，日系社会全体の構成とかなり近い分布をとるのはある意味で当然であるが，カリャオ地域でより高い集中を示している」の文章がそれである。

２．柳田利夫編著（1997）『リマの日系人－ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店，426ページ

1995年（平成７）慶應義塾大学は柳田利夫教授を中心とした研究グループのペルー日系社会総合調査研究プロジェクトに研究助成を与えた。本書はこの助成にもとづいて，ペルーおよび日本の両国において行われた調査研究の成果をまとめたものである。

本書の内容構成を目次でみると，序論は「1995年リマ日系社会総合調査」（柳田利夫）の解説である。第1部日系社会の形成と変容は，第１章「呼び寄せネットワークと県人意識の形成－リマ在住福島県人の事例を通して」（赤木妙子），第２章「二世の言語変容」（日比谷潤子），第３章「宗教的実践にみる日本文化の連続と非連続」（荒井芳廣），第４章「日本出稼ぎとエスニシティ変容」（有末賢），第５章「戦後日系社会の変容とフジモリ政権の誕生」（堀江湛・柳田利夫）である。

第２部日系社会の現状は，第６章「ライフスタイルと健康－サンパウロ在住者との比較を通して」（津金昌一郎），第７章「アルコール関連遺伝子と飲酒行動」（三村将），第８章「二世の生体計測調査」（高山博），第９章「日系人からlos nikkeiへ－新たなエスニシティの形成」（柳田利夫）である。

日系社会からの報告は，報告１「日系人の政治意識」（アメリア・モリモト），報告２「フジモリ政権と二世の政治参加」（ビクトル・ヤマモト）である。なお，付録として「1995年リマ日系社会総合調査アンケート調査表」がついていて，「日本・ペルー交流史略年表」や西文要約もある。

ここで，今少しペルーの日系人，沖縄県出身移民に関する内容に関して取り上げてみよう。本書巻頭の『リマの日系人』刊行にあたって，のなかで在日ペルー共和国大使ビクトル・アリトミは，つぎのようにペルーにおける日本人・日系人に高い評価を与えている。

> 1899年から日本人移民を受け入れてきたペルー社会では，科学・芸術・商業・政治・スポーツなどの諸分野における日本人・日系人の果たした役割は否定しがたいものである。日本人の血を引くペルー大統領が1990年に選出されたことは，この事実と，ペルー国民が日系社会に抱いている肯定的なイメージとを確信させるものであった。ペルーにおいて，はじめは農業者として，その後都市に移り，その他の職業に従事し，小規模な商業活動を開始した日本人は，頑張り屋で勤勉，かつ正直であるとみなされている。ペルー人は，日本家族のまとまりと日本人・日系人の事業における互助・連帯性を高く評価しているのである。

ペルーにおける沖縄県出身移民について触れたものとしては，第6章津金昌一郎「ライフスタイルと健康」がある。津金は調査成績として，調査対象者の社会的特性を表にまとめ，以下のように結論づけている。

父親あるいは母親の出身県については，沖縄県である割合が，リマで60～70％，サンパウロで10～20％であり，これまで推計されていた沖縄県出身者割合（ペルー－65％，ブラジル－10％）と類似した傾向にあった。また，婚姻状況に関しては両地域共類似した傾向にあったが，学歴は男女共にリマのほうが統計的有意に高かった。この傾向は二世に限っても変わらなかった。サンパウロ二世の学歴の高さが，現在の日本在住者と比して際だって高いことが観察されていたが，リマはそれ以上に高いことになる。

第8章高山　博の「二世の生体計測調査」のなかで，リマ日系人の生体人類学的特徴として，つぎのような結論をだし，沖縄県出身移民の特長が現れていると指摘する。

本章冒頭（はじめに）でも記したが，日系ペルー人集団は，日本列島内の地域集団としては，その出自集団（南西諸島・沖縄県）の特長をよく表すと同時に，日本列島で第二次世界大戦後起きた「大型化」「貴族化」を先取りしていると言える。現代日本人青年との差は，出自集団である南西諸島の形質が，ペルーの欧風の環境下（生活様式，栄養など）でより強調されてきた結果であろう。仮に，第二次世界大戦後の日本国内で起きた身体の変化が「欧米型」生活様式に起因するものとするならば，今回の調査で，現代化したと推定される計測値（項目，形質）が生活，環境の影響をよく表すものと考えられる。具体的には，身長をはじめとする高さの計測値（胴の長さ，手足の長さなど）と足形の計測値が代表的なものであろう。逆に，環境，生活様式による影響を受けにくいものとして，頭，顔の形態，特に顔の形，目鼻の配置，形などが考えられる。奇しくも，旧来の人類学の生体計測に関する考え方を踏襲する結果になった。

第9章柳田利夫の「日系人からlos nikkeiへ－新たなエスニシティの形成」のなかで，1995年（平成7）8月時点のペルー・リマの日系社会内部での婚姻について，以下のような表（論文中では表4）を示し，沖縄県出身移民との関連を含めて，解説を行っている。

つぎに，表では，インタビュー調査対象者の両親103組の出身地と婚姻の関係についてまとめてみた。両親そろって一世であったケース64組のうち，59組（92％）が同県人であった。異なった県人の組み合わせ5組についても，山梨・静岡・広島・岡山など，地理的に近いことはもとより，社会経済的にも関係の深い県の組み合わせになっている。残念ながら，調査対象者のほとんどが，両親の郡町村レベルでの出身地について認識しておらず，確認することはできなかった。つぎに，一世と二世の組み合わせ20組をみると，その7割にあたる14組で，一世の男性は同県人の系譜を引く二世を配偶者としている（あるいは一世の両親は，自分と同県人の一世男性を二世の娘の配偶者に選んだ）ことが判明する。さらに，二世同士の婚姻についても，8組のうち少なくとも半数は同県人の系譜を引く者同士で配偶者を選択していた。出身県の確

認できた残りの２組も，それぞれ愛媛・山口，熊本・鹿児島と一世のケースと同様の傾向がみられた。また，103組中には，沖縄県と他県人ないしその系譜を引く二世との婚姻例は皆無であった。

表　両親の婚姻

一世同士の婚姻（64組）

同県人

父　親	母　親		%
沖　縄	沖　縄	43組	(67.2)
熊　本	熊　本	2組	(3.1)
山　口	山　口	2組	
和歌山	和歌山	2組	
岐　阜	岐　阜	2組	
福　島	福　島	2組	
長　崎	長　崎	1組	(1.6)
福　岡	福　岡	1組	
愛　媛	愛　媛	1組	
高　知	高　知	1組	
広　島	広　島	1組	
静　岡	静　岡	1組	

異県人

父　親	母　親	
山　梨	静　岡	2組
広　島	岡　山	1組
鳥　取	兵　庫	1組
滋　賀	愛　知	1組

二世同士の婚姻（８組）

父　親	母　親
カニエテ（？）	トルヒージョ（？）
カニエテ（愛媛）	チクラーヨ（山口）
チャンカイ（熊本）	チャンカイ（鹿児島）
ワラル（沖縄）	リマ（沖縄）
ワラル（福島）	スーペ（福島）
リマ（？）	リマ（？）
リマ（広島）	ワラル（広島）
リマ（沖縄）	ワラル（沖縄）

一世と二世の婚姻（20組）

父　親	母　親
沖　縄 (1)	バランカ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	カリャオ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	カニエテ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	チャンカイ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	ワチョ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	リマ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	リマ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	リマ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	リマ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	リマ／沖縄 (2)
沖　縄 (1)	パティビルカ／沖縄 (2)
福　岡 (1)	チンチャ／福岡 (2)
福　岡 (1)	ワチョ／福岡 (2)
福　岡 (1)	リマ／広島 (2)
福　島 (1)	アレキーパ／熊本・福岡 (2)
熊　本 (1)	カリャオ／？ (2)
富　山 (1)	リマ／富山 (2)
滋　賀 (1)	リマ／福岡 (2)
東　京 (1)	ワヌコ／？ (2)
島　根 (1)	カニエテ／？ (2)

日系人と非日系人の婚姻（11組）

父　親	母　親
沖　縄 (1)	アンカシ
沖　縄 (1)	アレキーパ
沖　縄 (1)	リ　マ
沖　縄 (1)	トルヒージョ
広　島 (1)	アレキーパ
広　島 (1)	アヤクーチョ
滋　賀 (1)	アンカシ
スーペ／千葉 (2)	リ　マ
トルヒージョ	福　島 (1)
トルヒージョ	カスマ／沖縄 (2)
カリャオ	ワラル／大阪 (2)

柳田（1997）より作成。

すでに述べたように，調査対象者の両親の婚姻は30年代から50年代（1930年代～1950年代：引用者注）前半が大部分であったと考えられるが，当時の日系社会では９割が日系人内部で配偶者を選択していたこと，しかも，同県人ということが選択上の基準としてかなり強く機能していたことが推測される。

３．柳田利夫／文・義井豊／写真（1999）『ペルー日系人の20世紀－100の人生，100の肖像』芙蓉書房出版，205ページ。

本書は日本人ペルー移住100周年記念委員会協賛による，1899年（明治32）に最初の移民船佐倉丸がペルーに着いてから100年，103歳の一世から９歳の五世の少年まで，さまざまな世代の日系人100人が歩んだ人生を，聞き取りによる文章と，素顔を捉えた写真で綴った出版物である。この100人の面接聞取調査によるペルー日系人の人物伝のなかに，沖縄県出身移民は一世・二世・三世・四世の合計29人が掲載され，これは全体の29％を占める。以下，この29人について，氏名・年齢（1998年調査時現在）・在秘（ペルー滞在）年数・出身市町村名・続柄を記し紹介しよう。

１：安慶名カメ・103歳・在秘66年・具志川市
２：安里鍋助・90歳・在秘70年・伊是名村
３：仲地正雄・88歳・在秘73年・本部町
４：金城光太郎・87歳・在秘69年・糸満市旧高嶺村
５：城間うめ・84歳・在秘61年・中城村字久場
６：比嘉啓発・84歳・在秘67年・名護市字屋部
７：兼久トミ・82歳・在秘62年・与那城町
８：大城カメ・79歳・在秘20年・大里村
９：ヘラルド・ヤマカワ・ヒラシキ・67歳・日系二世，父今帰仁村出身の山川喜慶・ユキの三男
10：金城武吉・63歳・在秘37年・糸満市旧兼城村
11：レベカ・クニヨシ・キヤン・61歳・日系二世，父宜野湾市出身の国吉真徹・母中城村出身サダの次女
12：ロサ・マタヨシ・マタヨシ・60歳・日系二世，日本名キヨコ，両親沖縄県出身の３女・８人兄弟の４番目
13：アレハンドロ・サクダ・モロマ・60歳・日系二世，父沖縄県出身の佐久田仁太郎・母ナミの10人兄弟の５番目
14：ダビド・ヤマシロ・シマブクロ・58歳・日系二世，父沖縄県出身の山城賀永の６人兄弟の次男
15：サムエル・マツダ・ニシムラ・57歳・日系二世，両親沖縄県出身
16：ロシータ・ナカンダカリ・デ・イイムラ・56歳・日系二世，父久米島具志川村出身の仲村渠昌志・母ツルの６人兄弟の４番目で四女
17：ペドロ・トウモン・ビクトリアノ・49歳・日系二世，父日本人東門清光・母先住民アシャ

ニンカ族出身の長男

18：知念義明・48歳・兵庫県尼崎市で出生，宮崎県で育つ，父義正はペルー生まれの二世

19：イサベル・ミヤシロ・ミヤシロ・48歳・日系二世，沖縄県出身の宮城亀昌・フミの末子

20：ルイス・マキヤ・オナガ・46歳・日系三世，父沖縄県出身の真喜屋キョン・母日系二世フェリシータの長男

21：イチ・テルキナ・ウンテン・46歳・日系二世，父知念村出身の照喜名名誠・母マカトの８人兄弟の末子

22：フアン・トケシ・グスクダ・シロタ・44歳・日系三世，日本名トシヤ，父国頭村出身の渡慶次賀得・母日系二世キク・シロタの９人兄弟の８番目

23：ルイス・レイェス・ヒガ・43歳・日系三世，アンカシ県出身の父クラウディオ・母日系二世の比嘉フリアの４人兄弟の三男

24：トマス・タザト・42歳・沖縄市で出生，4歳の時渡秘，日本名友康，父田里友正・母しずえの３人兄弟の末子

25：アナ・カナグスク・アカミネ・38歳・日系三世，沖縄系二世の父フリオ・母ルイサの３人兄弟の長女

26：エドアルド・トケシ・ナカザト・38歳・日系三世，帰来二世の両親の３人兄弟の末子

27：セシリア・ナガミネ・ヒガ・34歳・日系三世，日本名ジュンコ，日系二世の父オスカル・母アナの４人兄弟の３番目

28：イスマエル・アゲナ・スエヨシ・25歳・日系四世，日系三世の父アレハンドロ・日系二世母ノルマの長男

29：カンディ・スエヨシ・サクモト・25歳・日系二世，日本名ミツエ，父伊是名村出身の末吉隆・母美枝子の３人兄弟の長女

以上，ペルーにおける沖縄県出身移民の一世から四世まで，その年齢も103歳から25歳までに及ぶ29人の小伝記の名簿をあげてみた。本書では一人につきわずか１ページの文章ではあるが，各人各様の体験談と職業などの履歴や背景が記載され，また，無地をバックにした素顔の１ページ大の写真は，読むものに感動を与える。本書は沖縄県出身移民が大部分を占めるペルーにおける日本人・日系人の100年目の100人の貴重な人的財産と言えよう。

Ⅳ．アケミ・キクムラ＝ヤノ編・小原雅代他訳『アメリカ大陸日系人百科事典　写真と絵で見る日系人の歴史』明石書店，2002年（平成14）10月15日発行，424ページの解題

本書は，全米日系人博物館（ロサンゼルス在）の企画による南北アメリカ大陸の日系人移民が在住する国々を対象にした日系人に関する百科事典である。内容を目次構成で見ると，第１章日本からの移民，第２章日系アルゼンチン人，第３章ボリビアの日系社会と日系人，第４章ブラジルの日本人移民とその子孫，第５章カナダの日系社会と日系人，第６章チリの日本人移民と日系チリ人，第７章メキシコの日系コミュニティ，第８章パラグアイの日系人と日本人，第９章ペルーの日本人移民とその子孫，第10章アメリカ合衆国の日系社会と日系人である。

本書の内容を具体的にみると，アメリカ合衆国上院議員ダニエル・K・イノウエの「序文」から始まり，「日本語版の刊行に寄せて」「はじめに」「用語リスト」があり，ゲーリー・幸夫・沖広の「日本人から日系人へ」は出色の論文である。第1章日本からの移民は，東栄一郎の「日本人海外渡航史」，飯野正子・木村健二・杉浦直の「日本人移民研究概説（1905～98年)」，移民研究会（東京在）の「日本移民研究文献解題」，東栄一郎・小原雅代の「補完資料」で成り立ち，日本人移民研究にとって貴重な文献・資料である。

第2章以下は各国の日本人移民・日系人の歴史，文献解説，文献解題，補完資料から構成され，南北アメリカ大陸の日系人が在住する主要9か国について，学術的によくまとめられている。今後の日本人移民・日系人研究の基礎資料として貢献すること大であろう。

第9章ペルーの日本人移民とその子孫は，日系ペルー文化基金，日本人ペルー移民記念博物館の共同制作によるものであり，333ページから368ページまで36ページにわたり，貴重な論文・統計資料・写真などが要領よくまとめられている。ちなみに，具体的な内容をみると，アメリア・モリモトの「ペルーの日本人移民とその子孫（1899～1998年)」，ラウル・アラキ，ホルヘ・M・ナカモトの「日系ペルー人文献解説」，ラウル・アラキ「日系ペルー人文献解題」，アメリア・モリモトの「日系ペルー人にとっての歴史上の重要地」（地図）と「ペルー日系人口統計資料」（表）の「補完資料」がある。

V．おわりに

以上，ペルー沖縄県出身移民100周年記念誌（仮）資料としての若干の文献目録と解題を行ってきた。取り上げた文献の単行本としては伊芸銀勇編の『ペルー移民75周年記念誌』，柳田利夫編著の『アメリカの日系人－都市・社会・生活－』『リマの日系人－ペルーにおける日系社会の多角的分析』『ペルー日系人の20世紀－100の人生　100の肖像』の3冊，アケミ・キクムラ＝ヤノ編の『アメリカ大陸日系人百科事典　写真と絵で見る日系人の歴史』の合計5冊である。このほかペルーの沖縄県系人関連の著書や論文等は日西両語を含めてまだまだ数多くあると考えられる。本稿では日本語文献の一部を紹介したにすぎない。これに最近のペルーにおける沖縄県系人関係の著書を追加すれば，以下の4冊があげられる。

①ペルー沖縄婦人会編『ペルー沖縄婦人会20周年記念誌』ペルー沖縄婦人会，1998年発行，169ページ。

②ドリス諸見里・宮里編著『ペルー沖縄市郷友会　20年の歩みと証言記念機関紙（誌)』ペルー沖縄市郷友会，1999年4月発行，475ページ。

③伊芸銀勇著『わが魂のペルー人生－70年回想記』自費出版，2005年3月発行，109ページ。

④諸見里・宮里ドリス，島袋・伊波ファン共著『沖縄　ペルーにての1世紀』リマ市の出版社，2006年1月，111ページ。

今後，日系人，沖縄県系人の一世・二世・三世などとつづく100年余の歴史と実態の記録が，南米のペルーを始め，グローバルな世界のなかでその成果が数多く現れんことを希望する。沖

縄県においては移民関連資料の情報および発進基地として，琉球大学の移民研究センターがその役割を担い，貢献できればと考える。

（いしかわ　とものり・琉球大学名誉教授・人文地理学）